

絶対者から、個別的特殊性へと並列化され、まさに市民社会で個体が一個の限定された特殊性つまり私欲として他の特殊性としての私欲と関係させられるのと同じようにして相互の等価性において、特殊的私欲としての国家として互いに関係させられることに他ならない。そのこと自体、国家がその超越的倫理性を剝奪されて、国家原理が市民社会の原理に還元・収斂されてゆくことに他ならない。

このとき、内には家族の非倫理化、外には諸国家間の相対化による非倫理化という狭撃によって、国家はその超越者としての位置を喪失する。

そのとき、国家はまた、人間にとって、自己の本質の對象化として、自己の本質の実現であることをやめ、理想像であることもおわる。そのとき、国家はまた、人間にとって、幻想の對象であり、幻想の表出であることもなくなる。それによって、人間は、自己のあるがままの姿に直面する。にもかかわらず、人間が、つねに自己を對象化し、その對象化された表象にむけてあるがままの所与の己れをのりこえてゆくものであるとするならば、いかなる幻想にむけて自己を投企するのであるか。あきらかに、〈私〉であることがそのまま〈共同性〉の表出であるような、そのよう

な実存への投企以外にはありえない。もちろん、それは個人道徳的な意味ではない。だが、人間が自己破滅をへないで、それがありうるか否かについて、私は懐疑的であらざるをえない。

無告なる思想

序・支配される者たちの冥い回路

衛 紀生

猪狩満直の一編の詩をなぞることから始めなければならぬ。おのれの胎内に沈澱し、眠っているウツ血した想いとの出逢いは、いつも唐突に、しかも、予感めいた臭気を漂わせてやってくるものだ。

気怠さに身をまかせていた時代に、ふとしたことから生じた雫が、手に負えないほどの速さで思想の蒼海へ向って落ちて行く。その速度を手探りでしか確かめられない苛立さに、わたしは、なかば諦めをとまなつた息継ぎを繰り返しながら、時の粒子のまわりを堂々めぐりしていたのだが、猪狩の詩が、不意にわたしの凍結しかかった結界に舌を這わせたとき、わたしは、ともかくもまず言葉をさがさなければならぬと、咄嗟にそう思った。痺れる唇に足をすく

われそような、たどたどしい思索の序曲は、この詩をおいて他にはない。

昭和四年に発刊された『アナキスト詩集』に収められている、土地が死んでしまった”がそれである。

土地が痩せ切れ

土地が死んでしまった

動かない百姓ら

死んだ土地にしがみついている

鋤を持って立つが

偕て、体が崩れてしまふ

どの面も、どの面も血の気が無い

眼の光を失ってしまった

全耕地を蔽ふカマドガヘシは花咲き

カマドを嘗めつくした魔の舌のように

ベラベラ秋風にゆれてゐた

わたしはここで、猪狩の来歴とこの詩の世界との脈絡を語ろうとしているのではない。わたしは、土と人間のあいだにわたされた、寡黙ではあるがしたたかな鉄鎖を明らかにしようと考えているのだ。

もし猪狩の生がこの思索にかかわるのだとするなら、それは、出稼ぎ先の信州から（文学その他と当分絶縁）するむね更科源蔵に連絡し、その四ヶ月のちの無政府共産党事件や、信州を中心とする農村青年社事件にも、おそらく沈黙するしかなかった痛苦にみちたかれの世界を、結果として浮びあがらせることが出来るかもしれないという意味においてであろう。

この（動かれない百姓ら）は、歩きだすだろうか。わたしは、まずそう自らに問いかけることで、この詩の原風景に立ちあわなければならぬ。

——土はかたくなに人を拒絶したが、それでもなお、人は、芋の葉しか入っていない胃袋を忘れて、土を抱こうとしていた。誰もが遣り場のない怒りを感じてはいたが、

誰ひとりとして叫ぶ者などいなかった。叫ぶまゝに狂ってしまうか、あるいは飢え死んでしまうのだ。

土に向つて呟く二、三の言葉がかれらのすべてだった。人は歩むならわしを忘れてしまったかのように、カマドガヘシの乱舞に身をまかせていたし、詩人はなにかを激しく孕んだが、口籠つてしまい、僅かな吃音だけが喉元を通り抜けていった。

支配は必ずしも他から押しつけられる形でやってくるとは限らない。自覚できない階級の記憶が個を呪縛し、終ることない敗走の円周運動を続けることのほうがむしろ多いとさえいえる。みずからがみずからを疎外し、被支配の深みにその身をおどらせるのだ。

（動かれない百姓ら）は、決して歩きだしはしないだろう。なぜなら、かれらは、その土地がかれらの生にとつてすべてであると、まず呑みこむことで開拓民であったのだから。そして、その支配のヤリ口は、絶えずわたしたちの祖系を隔れ、歩むならわしを失わせ、無告の淵へ追いやり続けてきたものなのだ。思い起してみるとよい。つねに支配者は、民衆を土地に縛りつけることによって支配者たりえたのだ。

わたしはいま、〈大竹ハナの裏切り〉を想っている。猪狩満直が絞り出すように発した詩の世界と、真反対にあるかのように思える三里塚闘争における大竹ハナの存在と行動に、わたしは、少なからず興味を抱いたのである。いっぽうは土地にしがみつくことで絶望的であり、いっぽうの闘いは、土地を明け渡さないことで階級的であり、そして、ゆつたりとその間を浮遊するように揺れ動く〈大竹ハナの裏切り〉。わたしは、この不可解な図式の糸をたぐりよせることから始めなければならぬだろう。

まず、大竹ハナの裏切り行為のあらましを、わたしがこの事件を知った戸村一作の「三里塚闘争と大竹ハナの裏切り」（現代の目、七二年三月号）から抜いてみよう。

〈天浪の共同墓地は九月一六日代執行から除かれ、今日まで残っていた。しかし、墓地はターミナル予定地のど真中に位置していて、空港公園としてはすでに本年六月開港という宣伝で、一刻も早い墓地の収用を狙っていた〉

〈天浪共同墓地には古込の大竹ハナの墓地もあり、その子供の遺骨が葬られてあった〉

〈噂になっている天浪共同墓地が大竹ハナらによって、

公園に売り渡されたということが同盟に伝わった〉

〈同志小川明治の遺体発掘と天浪共同墓地の売り渡しの主謀者は、古込の大竹ハナであった。大竹ハナの裏切り行為は、同盟六カ年の闘いの中で最大のものであった。なぜならばハナは、反対同盟婦人行動隊の副行動隊長として、二期工事直前の裏切り行為は到底許さるべきものではなかった〉

〈同盟の重責にある幹部としての裏切り行為は、驚くべき犯罪行為であつて、その罪は階級闘争の中にあつてまさに死の断罪に値する〉

以上が、極く簡単にかいつまんだハナの裏切りの内容である。このハナの行動はどこからきたのだろうか。戸村一作はいつきにこう語る。

〈まず、金に目が眩んだ権力に対する敗北感である。今回の裏切り行為は、反対同盟を権力に売り渡すことによつて殊勲と金を得ることがハナの狙いであつたのだ〉

〈大竹ハナに欠けた最大のものがあつたのである。それは大竹ハナの無思想であり、それが金銭の誘惑による国家権力に対する敗北感を招いた、最大の要因とい

わねばならない)

わたしは(大竹ハナの裏切り)を全肯定しようとは思っていない。だがしかし、戸村のように一刀両断することも出来ないのだ。もしかが語るように、(三里塚闘争)にあつて、大竹ハナをいかに止揚するかは、闘争を左右する一大関門である。(略)大竹ハナのユダ的存在を、自己内在的に捉え返し、これをいかに止揚するかという実存的人間性の問題として捉えなければならぬ。この時点で、はじめて大竹ハナを超えることができたといえる)なら、わたしは、(金)や(思想)以前に語るべきことがあるように思えてならないのだ。そこに錘を垂らすことによつて、(思想)以前の思想、すなわちわたし自身に内在する(反国家の論理)を手にすることが出来るのではないだろうか。(無思想)であることがいつも罪悪であるとは限らない。ましてや、その思想が、盲目的なインターナショナルを標榜するものであるなら、なおさらのことだ。いまわたしたちは、かたちにならずに意識の底に澱んでいる(危険思想)を、確かなものとして行く作業を進めなければならぬのだ。

長いものにはまかれる、とは古い諺であるが、この(民

うとする怒りの牙を抜くことに他ならない。そして、義民伝説もまた、同じ回路で民衆が生んだものなのだ。

そのことは、それらの祠を立てた年をみれば明らかになる。成立した時代は、必ず飢饉の時代と重なるのだ。

一撓や強訴の直後は、主謀者の名を口にすることさえも恐れていた人々は、年がすぎ、いくらかでも緩やかな生活を取り戻すうちに、次第に人々のなかで主謀者の名は無害なものとなつてゆくことを意識する。けれどもそれは、共同体における一種のタブーとして意識されることであつて、全く公然化するものではなかつただろう。なぜなら、その名を口にすることは、痛みであり、口にしない限りにおいて、それは聖なるものなのである。

無害であることとタブーであることの二重構造が止揚されるには、世代の推移が必要であつた。そして主謀者の名は、身近な虚像としての伝説となる。それは、修身にも似た牙のない社会教育の役割を負つてだ。だが、ひとたび飢饉が来れば、それは再び口にすることもはばかるタブーとなる。それは、かつての痛みのためではなく、支配者に対する恐怖からだ。一撓を恐れる状況にあつて、かつての主謀者の名は、支配者にとつても忘れたいものであつたに違

衆的ニヒリズム)が、権力をより巨大な権力へと動かしたことは否めない。ただ、その(民衆的ニヒリズム)が、闘いの敗北の果てに生じたもののかは考えてみる必要がある。ニヒリズムは明らかに絶望を前提とする心情の様式である。ただそれは、絶望を受け入れているが故に、時に暴力的ではあるが、つねにそれは諧謔として無力化された表現となる。あるいは自虐としてだ。

(民衆的ニヒリズム)は、その自虐を根底にすえた心情であり、権力を外側から支えるものとして絶えず機能してきたといえる。たとえば、弥兵次神社とか佐五郎地藏というふうには、人名がつけられた祠に出逢うことが地方に出るとよくある。それらを、おそらく一撓や強訴の主謀者の名を冠したものであろうと想像することは、さして難しいことではない。

人々は、自らをかえりみず、あえて死を賭して立ち上つた者を、自分の生とはへだたつた彼岸へおしやることで、自己救済をはたしたのであろう。利害を代表した者を、利害の彼方へ運び去ることによつて、その闘いを聖戦であると幻視し、闘わなければならないおのれの状況を自虐的に黙殺しようとしたのではないだろうか。それは、歩きだそ

いない。

村々からはなんの声もあがらないとき、人々は何者かを待望するのである。それは、*「袴垂れ」*のような義盜と呼ばれる虚像であつてもよいのだが、かれらは、悲惨な状況にあつて、よりカタルシスの持続するものを選びだすのである。それは、タブーを犯すことに他ならない。外部との緊張によつてタブーであるものは、たとえ公然化しても痛みとはならない。祠を立て、かつての一撓の主謀者の名をそれに冠することで、かれらは、何かを待望したのである。

この場合、待望する心情とニヒリズムは矛盾なく同居する。なぜなら、かれらは何も来ないことを知っているのだから。だから、それらの祠や義民伝説は、自分が決してない得ないものとの距離を確実に対象化する、いわば(民衆的ニヒリズム)が生んだ被支配の迷路への入口であるといつてよいのではないだろうか。(民衆的ニヒリズム)は、死闘のあとに生じたものではないのだ。それは、土地から逃げることも出来ない、いや、逃げることに許されない、あるいは、先祖伝来の土地という自己疎外のなかで土地を離れない者たちの習性ともいうべきものなのだ。

(同盟はこのおれに何にもしてくれなかつたじゃねえ

か。一体今まで何をやったというんだい。何一つやっ
てくれないじゃねえかよ。それで反対しろ、反対しろ
って何だい)

この大竹ハナの言葉は、戸村のいうように「同盟に依存して生きていこうとする大きな誤り」が口から出たものだとはどうしてもわたしには思えない。かの女は何かを待っていた。それは黎明でなくてもよかつたのだ。強いられた移住の喪失感に拮抗するものを手にすることを待ったのではないだろうか。それを、思想性のない闘い、と糾弾するならば、わたしはその人間に対して、あえて「思想」とは何かと問わなければいけない。「思想」とは階級的言辭に飾りたてられたものなどでは断じてなく、また、それによつてわたしたちが闘つたことなどかつて一度もなかつたのだ。

だからといって、わたしは大竹ハナの裏切りを遣り過すわけではない。わたしは、かの女もまた避けて通ることの出来なかつた「土」へのまがまがしい同化意識を明らかにしたいのだ。大竹ハナの裡に存つた喪失感、この同化意識と表裏をなすものではなかつたか。かの女にとつて、

「土」への同化感を根こそぎ掠奪された後にくるものに拮抗できうる可能性は闘争にはなかつたのだ。戸村が真にハナを内在的に超えようとするなら、この「土」への同化意識こそ超えなければならぬものなのだ。「金」や「殊勲」は望むな、「思想」なのだ、と戸村が叫んでも、また、「ユダにも劣らぬ大竹ハナ」と語つても、この裏切りを止揚することなどできない。何度でも言うが、わたしたちは決してストイックな「思想」によつて「階級的盲目性」とやらを超越し、闘つたことなどないのだ。

「土」への同化。たとえば尾崎喜八のこの詩だ。

わたしらの親達も遠い祖先も、

みな此の大地を敬ひ愛した。

然しその子供らは土をうらぎり、

としどしに彼等の田畑を捨てた。

土は罰するだろうか、其の忘恩を。

いな、いな、土はいつも豊かに、

帰つた子らに惜みなく与える。

昔わたしらの祖先の頃は、

心あかるく、身もすこやかに、

畝から畝へ、畦から畦へ、
晴れやかな農事の歌が風に流れた。
やがて悪い思想が時を得て、
人々は祖先の土を金に換え、
営利の叫びがひしめき渡つた。

今わたしら都の日々を生きながら、
忘られた田舎の土をなつかしみ、
又よみがへる農は国本の正しい教に
ちからづけられて鋤をとる。
休日ごとにわたしらの踏む母なる土、
仰ぎ見わたす父なる空、
そして汗すれば汗に実りの此のとりいれ。

(土に帰る)

この詩に貫かれている「土」に対する賛美は、直線的に国家へ向い、そこに帰属することで安堵する。ここでは、個と国家は合体され、国家の利害から生じるゆがみは、全て個のレベルで是正することを強いられる。
古代から、いかに民衆を土に縛るかが、支配者にとつて重大な関心事であつたことは疑う余地のないことであろう。

神話を捏造し、あるいは氏神から天皇信仰へ連なる巨大なヒエラルキーを創り上げ、あるいは戸籍を整備し、あるいは武力を行使して、支配者は、民衆に「土」とのぬきさしならない関係をおしつけて来たのだ。大地は母であり、民はみな、そのはらからという思想は、「親達も遠い祖先もみな此の大地を敬ひ愛した」という意識、すなわち「先祖伝来の土地」という意識の延長上にあるものに他ならない。こう考えて来ると、ある土地に対する所有の意識は、根底から崩れてくるだろう。それは、幻想に他ならないからだ。戦後の農地改革は、一応近代化された「私有」を飴玉のようにばらまいたが、それとても極限においては、幻想以外のなものでもないことを露呈するに違いない。砂川、北富士、三里塚は、わたしたちに何を教えたのか。

民衆は、いまだかつて「土」を所有したことなどないのだ。所有を幻視していたにすぎない。否、幻視させられて

いるのだ。
強いられた定住は、国家意識によつて、絶えず強いられた放浪を抱えこまされる危さをもっているのだ。歴史はこのことを余すところなく証明している。強いられた定住と強いられた放浪の均衡の上に、支配は、安定した権力を保

つたのである。そして、〈民衆的ニヒリズム〉は、このバランス・シートを黙って受け入れて来たのだといえよう。はじめにあげた猪狩の詩の百姓の姿と、三里塚農民闘争は、それぞれ、強いられた定住と強いられる放浪なのである。

強いられる放浪を拒み、敵を日帝と米帝にまでエスカレート出来た三里塚闘争が大竹ハナを生んだのは極めて象徴的なことといえよう。ハナは、〈民衆的ニヒリズム〉をもつて、このバランス・シートを受け入れたのであるが、それは同時に、エスカレートさせた結果、敵が視えなくなつていったことを意味するのではないだろうか。日帝が、まさに日本政府そのものの本質であることは言うまでもないことだが、三里塚闘争が、大竹ハナの出現以前にハナを超えること——〈土〉との同化意識を超えることをせず敵をエスカレートさせたことに、問題があるのではないか。おそらくは、個のなかで、日本政府と公団という眼前の敵と、日帝という敵が分裂し、焦点が定まらない混乱があつたのではないだろうか。

闘争に裏切りはつきものであるが、それを最少にくいとめることはできる。強いられる放浪を拒む闘いが、〈思想〉

によつていつきよに敵をエスカレートしたとき、はじきだされたのが大竹ハナなのではないだろうか。ある日突然裏切りははじまらない。闘争の過程でそれは培われたものであろうし、闘争そのものがその矛盾を抱えこんでいたのだ。

戸村一作は、このハナの裏切りに対する同盟内部の盛り上りがないことを嘆き、それは一人びとりの中に大竹ハナがいるということである。したがって、大裏切り者・大竹ハナに対する怒りの爆発が、闘争として具体的に顕在化してこないのである」と語っている。わたしもそう思うのだ。〈土〉との同化意識や幻想の私的所有をてこにした日帝との闘いこそが、まず逆立したものであるのだ。そこを超えた闘いを組織しないかぎり、今後第二の大竹ハナ、第三の大竹ハナが登場するのではないか。

支配と被支配のあいだにわたされた複雑な糸は、決して社会科学的分析のみで明らかにできるものではない。歴史のなかで、まったく陽に晒されずに眠っていた記憶が、絶えず民衆の口をふさいできたことを誰が否定できるだろう。そして、それに目をつぶつて来たのが、近代日本の革命思想であり、既成左翼をふくめた日本の左翼思想であつたといえよう。近代的な革命思想がまったく必要のないも

のだとは思わないが、それらの階級的言辭は、民衆にとつて結果として意識化されるものであり、それによつて闘いが果敢なものとなつたり、優れた兵士が生まれたりするものではないだろう。

わたしは、民衆論や風土論のなかにこそ、眠っていた記憶を明らかにするキー・ワードが隠れているのではないかと想いつづけてきたし、それこそが〈危険思想〉なのではないかと思うのだ。この一文を書いているとき、戸村一作が来年の参院選に全国区から出馬する、というニュースを見なければならなかつた。この事実が、いまはつきりと受け止めなければならぬ。これが戸村自身の限界なのであり、同時に、あれほど尖鋭化し時代を背負つた民衆闘争さえも超えられなかつたものなのだから。

だからこそわたしはいま、被支配の冥い回路を、遅々とした作業ではあるけれども、ひとつひとつ明らかにして行かなければならないと思うのである。